

研究授業「保育内容総論」の報告
～子ども理解を深める保育者の役割～

有馬 則子*

Report on an Open Class “General Theory of the Contents of Child Care”:
Consideration of the class which can improve students’ child understanding
Noriko Arima

要約

本研究ノートは、2020年7月22日に高松短期大学保育学科で実施された研究授業の実施報告である。学生が「子ども理解を深める保育者の役割」について考える時、本時に至るまでの学びを振り返り整理しながら、より理解を深めていけるような授業展開であったかどうかについて考察を行った。

初めに「保育内容総論」を担当する授業者としての思いを述べた。次に、授業内容の振り返りを行うとともに、学習シートへの記述内容から、理解の状況を整理してみた。最後に研究授業後に行った検討会における参観教員からの意見や助言を基に、授業内容や方法等の考察を行い、自己の課題や今後の方向性について明確になったことをまとめている。

キーワード：研究授業、保育内容総論、授業分析

In this research note, I reported on the open class, which was held at the Department of Child Care, Takamatsu Junior College on 7/22/2020. In this class, we reflected and organized what we had learned in the previous classes, then tried to improve our understanding of children. The research question of this note was whether this class could make the students improve their understanding of children.

First, in this note, I described my thoughts as a lecturer of the course “General Theory of the Contents of Child Care.” Secondly, I reflected the contents of the class, then summarized students' understanding by referencing what they had written down on their worksheets. Finally, based on suggestions which came from colleagues who observed the class and attended the follow-up meeting, I examined the contents, methods and so on of this class, and summarized the topics and directions which became clear.

Key words : Open class, General Theory of the Contents of Child Care, Class analysis

受理年月日：2021年7月30日 *高松短期大学保育学科講師

1 はじめに

「保育内容総論」では、保育の基礎となる部分である子ども理解を深めたり、保育について考えたり等、他の授業で領域別に学んだことを総合的に捉えていく見方や考え方を養うことを目的としている。

目的達成に向けての授業者自身の姿勢として、次の2点について重視したいと考える。まず1点目は、保育が総合的に指導されるものであることが理解できるよう、さまざまな分野・領域の内容を盛り込むことである。2点目は、幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に指導すべき内容として示されている、具体的な活動が理解できるような事例の示し方について検討することである。以上のように、理論と実践を重ねながら学びを深めていけるような工夫が大切であると考えます。

2 授業内容について

授業内容は、学生が総合的な視点から保育を捉えたり、子ども理解を深めたり、知識を習得したりすることができるよう工夫した。例えば、テキストを使用しての講義はもちろんのこと、子どもの言動から心の動きを探ろうとする姿勢や、多面的な見方に繋がるような演習も取り入れるようにした。

しかし、本年度はコロナ禍の影響により、小グループでの話し合いの場をもつことが困難であり、昨年度までとは違った形での授業展開をしている。その中でも変わらず継続していることは、自分自身が今まで勤務してきた幼稚園やこども園での実務経験を活かし、園の中で繰り返されてきた様々な子どもの姿を、具体的な場面がイメージできるように伝えていくことである。事例については、授業内容のテーマに沿ったものを選択しているが、それが受講する学生にとってイメージしやすいものとなっていたかどうかを検討する必要がある。

本時は15回講義のうち14回目（6回目までが在宅学習であったため、実質は8回目）ということもあり、今までに学習をしてきた幼児教育の基本について再確認するとともに、習得した知識を活かしながら事例に基づく演習を通して、子どもの内面理解を深めていくことを重視した。

2.1 乳幼児期の教育の基本を再確認していく

小学校以降の学習の基盤ともなる乳幼児期の教育について、重要なポイント3点を再確認するところから授業を始めた。

まず1点目は「幼児教育の基本は、環境を通して行う教育である」ということである。環境については、対面授業開始後の初回の授業内容を再度伝えていった。物的・空間的環境と人的環境があることは、理解しやすいようにとOHC画面と学習シートに視覚的に示した。この時、環境を整えることと教材研究の重要性について、筆者の体験談を話し、人的環境の中では、幼稚園教育要領に記述されている「保育者の（教師）の6つの役割」と、保育は子ども理解に始まることを押さえていった。

2点目は「保育は子ども理解にはじまる」ということである。子どもを理解する時には、発達段階を踏まえることと、興味・関心や言動の奥にある心の動きを探り、捉えることが重要であることを重ねて確認した。その際、各園の教育課程・指導計画を基に保育内容・方法を考えて保育を構想しなければならないことも伝えていった。

3点目は「保育者の役割と基本的な姿勢として大切な3つのこと」を考えていった。この時、それぞれについて記述させたが、思い出せない学生が多く、繰り返し伝えていくことの重要性和、事例を基に実際の子どもの姿をイメージしながら体得するような工夫の必要性を再確認した。

2.2 事例を基に「子どもの心の動きを探る」演習を行う

「子どもを理解するための保育者に必要とされる基本的な姿勢」について、事例を基に演習を行った。ここでは、表面的に表れる子どもの言動のみを捉えるのではなく、その奥にある心の動きを自分なりに探ってみようとするのをねらいとした。事例は、授業で使用しているテキストの中から選択し、一部の表記を少し訂正したものを使用している。

＜事例＞ A児が砂場でスコップを使って大きな穴を掘っている。ある程度の深さまで掘ると「お水、入れよう」と言ってジョウロを持って水道へ向かう。そこへ、保育室から出てきたB児がA児の掘った穴を見つけ、置いてあったスコップを使って穴を掘り進め始める。

すると、水を汲んできたA児が戻ってくる。A児はB児に「ダメ！」と大きな声で言う。B児は驚いた表情で、持っていたスコップを「はい」とA児に渡す。A児は「いらぬ！」と言って、怒った表情でスコップを投げた。それがB児の足に当たってしまい、B児は大きな声で泣き出した。

「保育内容総論」より引用 神長美津子・津金美智子・田代幸代：編

上記の事例を読み、各自が考えたことを学習シートに書き、数名の学生に発表させた。その時の内容と、提出した学習シートへの主な記述内容と考察を下記に述べる。

Q1. A児の言動について、あなたはどのように思いますか？

- ・その深さまで自分で頑張ったのに、他の子に取られるのは嫌だったのかなと思う。
- ・自分が掘った穴を壊そうとしたように見えた。
- ・自分が作っていた穴を掘られてショック。悔しかった。
- ・横取りされたような気持ちで悲しい。邪魔された。
- ・自分一人で穴を掘って水を入れたかった。最後までやりたかった。

Q2. あなたがこの場にいたら、A児にどのようにかわりますか？

- ・頑張って掘ったことをまず認め、A児の気持ちを尊重したうえで、投げたスコップが当たって泣いているB児の気持ちを代弁する。
- ・どこが嫌だったのか声をかけて、気持ちを聞いてみる。
- ・「自分でやりたかったんだね」と言った後、「まずはスコップを当てたことを謝ろう」

と言う。

- ・遊ぶ楽しさが分かるように、さりげなく一緒に遊ばせる。
- ・互いに優しく注意し、謝り合う。
- ・B児がしたかったことを話し、B児の気持ちが感じられるようにする。
- ・二人で一緒に掘ったら、もっと大きな穴になると伝える。

Q3. それはどうしてですか？

- ・一方的にダメと叱るのはよくないし、A児の気持ちを潰すのはよくない。「謝りなさい」と言うのではなく、B児の気持ちも理解して、自分から「ごめんなさい」ができると一番よいと思うから。
- ・まずは気持ちに気付いてあげたうえで、投げるのはよくないことを伝えたいから。
- ・自分の思ったことを言わないと、モヤモヤするし嫌だと思うから。
- ・友達と遊ぶことの楽しさを知ってほしいと思うから。
- ・どっちも、わざとやったわけではないから。
- ・一緒に遊んでほしいから。

2.3 学習シートの記述内容から学生の授業課題に対する理解度を読み取る

- ・両者の思いを聞き、受け止めようとする姿勢が伺える。表面的な言動だけではなく、“～かもしれない”と子どもの気持ちを推察しながら寄り添おうとしている。自分の意見や考えをもちつつ、まずは子どもの気持ちを聞こうとする援助の大切さを評価した。それに加え、先入観や決めつけ、誘導による誤った捉えにならないよう助言を行った。
- ・もめごとがあっても、互いの誤解を解き気持ちの整理をすることで、友達と一緒に遊ぶ楽しさが実感できるようにすること、また自分から謝りたいと心が動くように後押しできるような関わりが大切であることに気付いている学生がみられた。
- ・今回は、あえて年齢の指定をしなかったが、十分な時間確保ができていなかったために、発達段階によって子どもの姿や保育者の関わりが異なることの理解までには至らなかった。
- ・授業者自身の時間配分の見通しが甘く、授業の振り返りにおいての十分な時間確保ができなかったため、泣き出したB児への適切な援助についての指導が不十分であった。翌週の授業内で指導を行ったが、当然、学生の意識は薄れてしまった。次年度の授業内容について、時間配分や授業形態を十分に考慮していきたい。

3 研究授業参観後の検討会について

研究授業後、引き続き検討会を実施した。8名(本人を除く)の保育学科の教員が参加のもと、本授業の振り返りと協議を行った。その後、授業についてのコメントをいただいたので、検討会のご意見と合わせ、評価できる点と改善点について集約し整理したものが以下のとおりである。

3.1. 授業内容の評価できる点について

意見① 保育の基礎中の基本・核となる授業のスタートとしての位置付け

・「総論」ということで保育内容の各科目を総括する位置にあり、教育内容や要領・指針等を十分に読み込む動機付けになっている。

・「保育内容総論」は保育学科の核となる授業であり、1年生前期に開講する科目として相応しく、学生にとって極めて有意義な内容であると考えられる。

・シラバスから、保育について初めて本格的に学ぶ1年前期の授業としては、基本中の基本を押さえることができる充実した内容であり、子どもの育ちの基本を押さえ、自分が何を学ぶべきか、保育者としてめざすべき方向性や役割（責務）についての気付きを得たり等、保育者になる自覚が芽生える授業であると思った。

・保育事例を用いることで、保育者としてのあるべき姿勢を考える機会になったと思う。

(考察①)

保育は、子ども理解に始まると言われるように、子どもの言動から心の動きを読み取ることが、保育に携わる者にとって最も基本的かつ重要な姿勢である。本授業での事例に基づく演習を通して、学生が学習シートに記述した内容を整理してみると、知識として得たことを基に理解しようとしている姿勢が伺える。保育の世界を一步步み始めたばかりで、実際の子どもの姿に触れていない段階だが、今後、このことを保育実習や教育実習等の保育現場に繋げたり、その後、保育者として日々の保育の中に生かしたりしていく力になってほしい。それは実際の子どもの関わりの中で、学びを深めていくことが望まれる。

意見② 授業を進めるにあたっての雰囲気づくりと、経験に基づく具体的事例の提供

・教室内の雰囲気が、何かを一方向的に「教える」という感じではなく、「語りかける」という感じのものであった。学生の方も自分から吸収しようとする気持ちを持ちやすくなっているようにも思われた。面白い話を聞いているという感じで、授業に取り組んでいた学生も多いのではないかと思う。

・豊富な現場経験のエピソードや身近なスーパーでのエピソード等の事例研修は、学生にとって分かりやすく楽しみながら考えることができる内容だった。

・授業の最後に読む絵本は、学生も楽しみにしているものではないかと思われた。

(考察②)

・学生の気持ちが授業に向かうための工夫は、大変難しい。入学までの学習に対する意欲や取り組む姿勢等は、非常に個人差が大きい。実際の保育現場での子どもたちの生の言動をエピソードとして伝えることで、“まずは聞いてみよう”と思えるような伝え方や内容等を吟味し、工夫する必要がある。

・事例を提示する際には、伝えたい内容や考える視点に沿ったものになっているかどうか、授業者の意図が明確であるかどうかを吟味した上で選択することが重要であった。

・子どもの目線や気持ち、親の立場や子どもを思う気持ち等様々なことを、学生自身に感じ取ってほしいと願い、毎回絵本の読み聞かせをしている。教えることと感じること、知識と感性の両方を大切にしたいと思い授業を進めているが、その効果も確認しながら授業

評価とすることで、今後の方向性がより明確になると思われる。

3.2 授業内容の改善にかかわる点について

意見③ 授業内容の精選と他の授業との関係性を考える

・保育内容＝指導法と考えているので、保育活動の中で 5 領域がどのように存在し、保育を展開していくのか等を指導していただけるとよい。

・授業を構成する時にどの順で扱うかについて、幼児教育の基本を最初に提示・再確認してから事例の検討に入る方法と、逆に事例から入り、子ども理解→環境に話を集約する方法があると思うので、15 回全体のバランスも見ながら、時には逆からいくのもよい。

・第 14 回の授業がこれまでの振り返りでもあるならば、事例の Question 部分で、その点が強調・深化・熟考されてもよかったのではないか。

・アプローチ・スタートカリキュラムについて簡単に紹介したが、学生には消化不良になることもあり、今の段階で学ぶべきことに絞り込みながら資料の精選をする必要を感じた。

(考察③)

対面での授業回数が、例年の約 3 分の 1 に減少しているという現状から、欲張った内容になっている。今回は、事例を通しての子どもの心の動きや内面の捉え方、多面的な見方、多様な関わりや支援について、各項目を丁寧に分析しながらそのことを深めていくことが重要であった。本時のねらいを明確にし、内容の精選を行うとともに、保育現場を経験していない 1 年生対象の授業であることを踏まえて、丁寧な説明と時間の確保が課題である。

3.3 指導方法の評価できる点について

意見④ 講義で学ぶことと学生が自ら参加し考えることの両面から

・第 14 回としてこの授業を振り返るために、重要なキーワードが随所に示されていた。講義を聞くばかりでなく、事例から考え発表させる形式も、全員が積極的に取り組んでいた。

・演習問題を取り入れることで、具体的な事例について学生自身が考える機会をもてていた。また具体的な事例を挙げながら、授業内容のより実際的な理解に繋がっていた。

(考察④)

昨年度までは、様々な遊びの場面における子どもの映像から心の動きを探ってみたり、保育者としての自分の援助を想定したりしながら話し合う学習形態をとっていたが、本時は、事例を読んだ後の発表という方法をとった。コロナ禍での工夫の一つだったが、できれば可能な限りアクティブラーニングの学習方法を取り入れることが望ましいと思う。

3.4 授業方法の改善にかかわる点について

意見⑤ 視覚教材の活用について考える。

・やや文字情報が多く、また言葉による説明が多かったように感じた。画面表示も基本的に文字情報であったので、もう少し視覚的な素材（図やイラスト、音声等）を使用してはどうか。昨今の学生は文字よりも図に反応を示す者が多いと思われる。

・学びを確実なものにするための学習シートだったと思うが、資料があることで、「語りかけ」が断ち切られてしまったようにも思われたので、無くてもよかったのではないか。

・学習シートの効果は、学生にとっては「何をしたらよいか」が明確になる、メモをする時と話を聞く時のメリハリが授業に生まれ得る等がある。しかし、活動の切り替わりに時間が掛かりついていけない、切り替え故に集中力が散漫になる等の課題が考えられる。また「少なくとも空欄にメモさえすればよい」という消極的な学習態度を生み出す可能性もあるかもしれない。

・学習シートの右端の点線のメモ欄はぜひ真似させていただきたい。

（考察⑤）

・OHC を使用しているが、確かに文字情報が多く、効果が得られにくかった。視覚教材の特性を活かし、紙面では伝えきれない内容を提供できるような工夫が必要である。そのためにも、教材研究や技術力の向上を図ることが求められていると痛感した。

・学習シートの活用は、メリットとデメリットがどのようなことであるかを明確にし、書くことに集中すると聞くことが疎かになるという課題も踏まえて、記入する内容や必要性を考えなければ効果的ではない。右端のメモ欄は、学生の自主性に任せる部分だが、学習への意欲や授業者自身の伝え方の大きな参考になるので、今後も続けていきたい。

意見⑥ 他の授業との連携について考える

・「3つの柱」「5領域」「10の姿」等、他の授業と連携して、歌や壁面、紙芝居や絵カード、体操・身体表現等、記憶に残すための工夫が考えられないだろうか。覚えやすくなる仕掛けやきっかけがあれば、学生の学び方（ラーニング・ティップス）指導にもなり、それが子どもの学びやすさに繋がればよいのではないか。

・「保育原理Ⅰ」は「保育内容総論」と授業内容が一部重複しているので、本授業では事例に触れたり、自分の意見を述べたり、あるいは先生と考えを交換したりする演習的な活動を多く経験してほしい。

（考察⑥）

例えば、観察参加の中で、朝の集まりは全員の学生が経験できる内容である。その中で、5領域の関連性や進め方等を、保育現場の実際と結び付けながら本授業で取り上げることについてのご提案をいただいた。また、教員それぞれが持つ事例を共有することでのメリットについてもご提案いただいた。主に実技の授業を担当している場合には、卒業研究等の機会に学生の意識を促す働きかけを繰り返す等の工夫も聞かせていただいた。私にできるところから前向きに検討していきたい。

意見⑦ 授業内容以外での配慮

・90分の授業は、1年前期の学生の中には長く感じる者もいるであろう。読み聞かせの時間を設けることで、マンネリ化しがちな授業が引き締まっている。学生自らが、先生の読

み聞かせの技術を習得すべく、五感をしっかりと働かせ、どん欲に観察してほしい。

・教員自身が当たり前に使っている「変容」等の言葉が、学生、特に一年生にとっては実はよく分かっていないことがあるので、言葉の精選が必要である。

・授業を前半・後半パートに分けて、前半は「語りかける」形で進めるための演習を行い、後半は資料で学びの確認を行うという進行が可能かもしれない。また、資料を使って授業時間外に予習・復習をし、授業は主に演習活動を行うというやり方も有り得る。

・話し方や聞き方、学生の気分や思考の導き方等、授業内容を学ぶ一方で、その方法にも「ベストな子どもとのかかわり方（保育者の手本）」があり、とても勉強になった。

（考察⑦）

・体調不良者の確認や OHC 画面が見えやすいような座席の配慮等、学生の心身の準備が整った状態で授業を開始することや、節目毎に理解度の確認をすること、机間巡視による声掛けや学生の発表後に拍手を促すこと等、互いを尊重しつつよりよい関係を築けるような配慮をしてきたことについては、参加教員から高評価をいただいた。

・自分自身が早口であるが故に、そのことを自覚しつつ明瞭で聞き取りやすいテンポでの話し方を心掛けている。参加教員からは、丁寧で分かりやすく心地よいという評価をいただいたが、ここで注意しておかなければならないのは、心地よさの裏には睡魔に襲われる可能性がとても大きいことを忘れてはならないということである。

4 おわりに

本授業の目的である保育の基礎となる部分を養うこと、つまりは、保育の出発点である子ども理解を深めることや、保育を総合的に捉えていく見方や考え方が養われているかどうかを、研究授業を通して振り返っていった。学生の授業に向かう姿勢や学習ノートへの記述内容は基より、参観教員の第三者の目を通しての意見や助言は大変参考になり、自身の授業の改善点や課題が明らかになってきた。

長年の教育・保育現場での経験を活かし、できるだけ具体的な事例等を基に授業を進めている。しかし、意欲や理解度に大きな個人差がある。この現状を理解したうえで、学生にとって分かりやすい授業、参加意欲が出るような授業となるよう、理論と実践をどのように組み合わせしていくのかを考え、今後も授業内容や方法をさらに工夫していかなければならないことを再確認した。

〔謝辞〕

本研究授業に協力いただいた受講生、参観いただいた先生方、そして検討会や参観記録にて貴重なご意見や今後の授業の方向性をご示唆くださった先生方に、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

- 参考文献 光生館（2018）乳幼児教育・保育シリーズ『保育内容総論』
文部科学省（2017）『幼稚園教育要領解説』
内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』
厚生労働省（2017）『保育所保育指針解説』
- 参考資料 資料1 2020年7月22日に実施した研究授業の指導案

【資料 1】

令和 2 年度 研究授業指導案

「保育内容総論」第 14 講

～子ども理解を深める保育者の基本的な姿勢～

担当：有馬 則子

◇日時：令和 2 年 7 月 22 日（水）4 校時 14:40～16:10

◇場所：本館 3 階 309 講義室

◇本時のねらい

○教育・保育について学んだことを振り返りながら、保育者としてのイメージをもち、保育において大切にしたいことを整理していく。

・環境を通して行う教育・保育、子ども理解、保育者の役割を中心に考える。

時間	内容	指導上の留意点・配慮事項
14:40	○本時の授業内容を整理し確認する。	○体調不良者の確認。
14:45	○幼児教育の基本について再確認する。 ・環境を通して行う教育 ・子ども理解 ・保育者の役割と基本的な姿勢	○前回までの振り返りを行う中で、保育の基本や保育者の役割などについて、各自が整理できているか反応を見ながら進める。 ○個人差に配慮しながらも、学習シートの有効活用ができるような声掛けをしていきたい。 (睡魔が襲ってくる時間帯なので)
15:05	○事例について、それぞれの考えを記述してまとめられるようにする。 ・自分がこの場にいたらという想定で、考えをまとめているか確認する。 ・数名の学生に意見を発表してもらう。 ・発表者以外の意見がないか尋ねる。 ・保育者の姿勢として大切なこと	○Q1～Q3 の視点で、事例を基に子どもの言動の受け止めや、保育者の援助について考える機会にしたい。 ○友達の発表を聞くことで、多面的な見方へのきっかけとしたい。
15:25	○教育・保育の質の向上に向けて ・5 領域、幼児期において育みたい資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿の確認	○今までに何度か学習してきたことの確認なので、今回は詳しい説明は省略する。思い出せない場合は、テキストや要領解説書で確認する。
15:40	○非認知能力とは何かについて考える。 ・非認知能力とは？ ・保育者の配慮すること	○日本の教育の中で培ってきた力の再確認と課題について考える。 ○発達段階に応じて、自己発揮と自己抑制のバランスのとれた保育を考えていきたい。
15:55	○本日の学びや感想をまとめる。	
16:00	○絵本の読み聞かせ 「ちょっとだけ」 瀧村有子：作	○子どもの気持ち、親の気持ちを絵本の読み聞かせを通して感じてもらいたい。
16:05	○各自で机の消毒をする。	